

公園の花と毒蛾

小川未明

青空文庫

それは、広い、さびしい野原でありました。町からも、村からも、遠く離れていまして、人間のめつたにゆかないところであります。

ある石蔭に、とこなつの花が咲いていました。その花は、小さかったけれど、いちごの実のように真紅でありました。花は、目を開けてみて、どんなに驚いたでありませんよう。

「なんという、さびしい世界だろう。」と思いました。

どこを見ましても、ただ、草が茫々としてしげっているばかり

りで、目のとどくかぎりには、友だちもいなければ、また、自分に向かつて呼びかけてくれるようなものもありませんでした。すぐ、自分のそばにあった、黒みがかつた石は黙り込んでいて、「寒いかな。」とも、また「さびしいかな。」とも、声をばかしてくれませんか。

小さな、気の弱いとこなつのはなは、どうして自分から、この心のわからない、なんとなく気むずかしそうに見える石に向かつて声をばかけられましょう。

花は、独りでふるえていました。ただ、やさしい眸で、自分をいたわってくれるのは、太陽ばかりでありました。しかし、太陽は、自分ひとりだけをいたわってくれるわけではありません。

この広い野原ひろのはらにあるものは、みんな、そのやさしい光ひかりを受けていたのです。この石いしも、また、こちらの脊せのたか高い草くさも、その光ひかりを浴びました。そして、それをありがたいともなんとおもおもつていないように平気へいきな顔かおつきをしていました。しかし、太陽たいようは、けつしてそれに対して気きを悪わるくするようなことがなく、平等びやうどうに笑顔えがおをもつてながめていました。

とこなつの花はなは、自分じぶんだけが、とくに恵めぐまれたわけではないけれど、太陽たいように対してたい、いいしれぬなつかしかんさを感じかんじていたので、す。そして、どうかして、すこしでも長ながく、太陽たいようの顔かおをながめていたものだねがと願ねがっていました。しかし、この高こう原げんにあつては、それすらかなわのぞない望ぞみでありました。たちまち、白しろい雲くもが

渦うずを巻まいて、空そらを低ひくく流ながれてゆきます。それは、すぐに太陽たいようを隠かくしてしまえばかりでなく、あるときは、まったくそのありかすらわからなくしてしまうのでありました。

花はなは、この雲くもの出でることをいっていました。しかし、そばにあつた石いしや、あちらの強つよそうな脊せのたかたかくさくさは、平気へいきでありました。花はなは、まだ、この雲くもは我慢がまんもできましたけれど、寒さむい風かぜと雨あめと、そして、息いきのつまつまるような濃こい、冷つめたい、霧きりとを、どんなにおそれたかしれません。

「ああ、あの冷つめたい、身みを切きるような、霧きりの出でないようにはならないものか。」と、花はなは、しばしば、空くう想そうしたのであります。けれど、自然しぜんの大おおきな掟おきては、この小ちいさい、ほとんども目めに入はいるか

入らないほどの花の叫びや、願いでは、どうなるものでもなかつた。そして、夜となく、昼となく、深い谷底からわき起こる霧は転がるように、高い山脈の谷間から離れて、ふもとの高原を、あるときは、ゆるゆると、あるときは、駆け足で、なめつくしてゆくのでした。

その霧のかかっている間は、花は、うなされつづけていました。毒のある針でちくちく刺されるような痛みを、柔らかな肌を感じたばかりでなく、息苦しくなつて、しまいには酔つたもののように、頭が重くなつて、足もとがふらふらとして起つていらなくなるのでした。そして、全身に悪感を感じるのでありました。霧が去つた後は、風に吹かれてぼたぼたと滴るしずくの音が、

この広い野原ひろのはらに聞きかれました。しかし、この苦痛くつうは、この野原のはらに生おいたすべての草くさや、石いしや、木きの上うへにかかる運命うんめいでありました。せめても、とこなつの花はなは、そう思おもつて、あきらめていたのではありません。かたわらの石いしや、あちらの脊せのたか高い草くさは、たとえ風かぜに吹ふかれても、霧きりにぬれても、平気へいきな顔かおつきをしていたのです。花はなは、それをうらやましくも、またのろわしいことにも思おもいました。

二

珍めづしく、空そらの晴はれた日ひでありました。山やまの頂いたから高こう原げんにかけ

て、澄みわたった大空の色は、青く、青く、見られたのです。

とこなつの花は、頭を上げて、じつと太陽の光に見入っ

ました。このとき、青い空をかすめて、どこからともなく、一羽

の鳥が飛んできました。最初は、ほんの黒い点のように見えた

のです。そして、だんだんその姿がはつきりと見えました。けれ

ど、それは、高く、高く、鳴いている声すら、とこなつの花の

ところまでは、かろうじて聞こえてきたほどであります。

「どこへあの鳥は飛んでゆくのであろう？　そして、あんなに自

由に。」と、花は、真紅の花びらを、風にふるわせながら独り言

をいっていました。

すると、その鳥の姿は、ますます、近くなってきたのでありま

す。花は、それを見て不思議に思っていました。どうして、あの旅の鳥は、こんなにさびしい殺風景な野原に下りるのだろう？ とにかくあの鳥は、この野原に下りようと思っっているのだと考えました。

小鳥は、はたして、花の思ったように、野原に下りました。しかも、すぐ花の咲いている石の上にきて止まったのであります。

この思いがけない、まったく理解されないできごとに、花はどんなにか驚いたでありませんよう。花は、つくづくとはじめて見る敏捷 そうな渡り鳥の、きれいな羽の色と、黒い光った目と、鋭いのがったつめとをながめたのであります。すると、小鳥はくびをかしげて、かえって花よりも熱心に花を見つめているので

ありました。

「あなたは、なにを探さがしに、この野原のほらへお下りおりになったのですか。」と、花はなはたずねました。

このとき、無頓着むとんちやくな石いしは、黙だまつて眠ねむつていました。小鳥ことりは、その石いしの頭あたまで、くちばしを磨みがきました。そして、花はなを見守みまもつて、

「私わたしは、あなたを見つみけて、わざわざこの野原のほらに下りたのであります。」と、答こたえました。

花はなは、恥はずかしい気きがして、これをきくと、黙だまつてうなだれていました。すると、小鳥ことりは、言葉ことばをつづけて、

「ほんとうにさびしい原はらであります。どこを見みまわしても、赤あかい花はなの姿すがたを見みないのです。私わたしは、ただ、あなたの姿すがたを見みつけたばか

りにここへ下りてきました。」

「私は、あちらから飛んできた鳥です。この青い、空の下を、山を越えて旅をしてきました。そして空の下に、身にしみるような悲しい、赤いあなたの姿を見つけたのです。どうか、それについての私の話を聞いてください。」

「私は、海や、山や、町の上を旅して、あてなく空のかなたから、かなたの空へと飛んでゆく鳥であります。悲しいことも、さびしいことも、数あまりあるほどのいろいろなめに遇うてきました。そのなかで、いまでも、この青い空の色を見るにつけて思い出さるるのは、北の海の上を幾日も航海したときのことです。あるときは、岸の上に、あるときは、人の住まない島に、ま

た、あるときは、船のほぼしらの上に、身を休めたのでありま
 した。そして、くる日も、つぎにくる日も、見るものは、青い、海
 の色ばかりでありました。」

「そんなときに、遠くゆく、船のほぼしらの頂に、赤い旗のなび
 くを見て、私は、どんなに悲しく、なつかしく思ったでしょう。
 私は、いまあなたの姿を見て、北海が恋しくなりました。あな
 たの姿は、あの船のほぼしらの頂に、潮風に吹かれて、ひるが
 える赤い旗のように、私の胸の血潮をわかせます。あなたがこの
 さびしい野原に、こうしてひとりで頼りなく咲いていられるのは、
 あの旗が、荒々しい、北海の波の間にひらめくのと同じだと
 考えられるのです。あなたは、さびしくはありませんか。」

かく、小鳥は語りました。とこなつのはなは、いつしか涙ぐましまでに哀しさを自らの心にそそられました。そして、頭をもたげて身のまわりをながめると、あちらの脊の高い強そうな草は、無神経に、いつもと変わらず平気な顔つきをしているのでありました。

三

とこなつのはなは、渡り鳥から、いろいろ世の中の有り様をききました。世の中というものは、かぎりなく広い。そして、こんなさびしい、頼りないところばかりが、世の中でないこともきかさ

れたのであります。

小鳥の話によると、よく自分の運命にも似ているといった、
 船のほぼしらの頂の赤い旗は、潮風にさらされたり、雨や、風
 に打たれて色があせたり、波のしぶきによつて、黒く汚れが染み
 出ても、それでも幾日めか、幾月めか、海の上に漂つた暁に
 は、燈火の美しい、人影が動く、建物の櫛比した、にぎや
 かな港に入つてきて、しばらくはおちつくことができるのだと知
 られました。

それにくらべて、なんという自分は不幸な境遇であろう。
 このまま永久に、この野原にいなければならないのかと考
 えました。花はもうじつとして、それにたえていることができませ

んでした。そこで、とこなつのはなは、小鳥に頼んだのであります。「あなたは、わたしをかわいそうとは思われませんか。もし、このままいつまでもここにいたら、わたしは、さびしさと悲しさのために気がふさいで死んでしまいます。どうか、わたしをにぎやかなところへ連れていってください。」と、花はいいました。

鳥は、花のいうことを聞いていました。

「小さな赤い花さん、あなたのお歎きは、もつともだと思えます。しかし、この世の中はどこへいっても、頼りなさや悲しいことやら、だれでも救われることはないのです。ここにおちついておいでなさい。私は、またいつかこの空を通るときに、かならず下りてあなたをなぐさめてあげましょう。そして、いろいろこ

の世よの中なかで見みてきたおもしろい話はなしをしてあげます。あなたは、それをお聞ききになれば、見みたと同じおなく感じかんられるでありますよ。もし、また私わたしが、どんなことで、ふたたびここにくることができなくとも、旅たびする鳥とりの中なかで、私わたしとおなじ心こころをもつ鳥とりが、きつと、あなたを見みつけて下おりてくるでありますよ。その鳥とりは、私わたしのように、やさしくいつて、あなたをなぐさめるでありますよ。それをたのしみに、あなたは、このさびしいところに、我慢がまんをしなければなりません。」と、小鳥こどりは答えました。

「小鳥こどりさん、それは無理むりではありませんか。わたしは、この世界せかいじゆうが風かぜの寒さむく、霧きりの深ふかいと思おもっていました。そして、なぜこんな世よの中なかに生うまれてきたらうとすらんでいました。それ

を、いまあなたから、にぎやかな街や、にぎやかな村の話を書きました。この世界は、けっしてこれだけでないことを知りました。どうか、わたしをにぎやかな町の方へ連れて行ってください。わたしはただ一目なりと明るい、にぎやかな世界を見ましたら、死んでもいいと思います。」と、花は、重ねて頼んだのであります。「なにが、あなたの幸福になるか、また、不しあわせになるかわかりません。」と、鳥は、すぐに花の願いをばきき入れませんでした。

「小鳥さん、しかし、霜が降り、雪が積もる前に、わたしは死んでしまわなければならない身の上です。あなたは、わたしが、さびしい荒れはてた土地で枯れてしまうのが、あたりまえの運命

であるとお考えなさるのですか？　どうか、わたしをにぎやかな町へ連れて行ってください。あなたのお力で、それができると思っています。」と、花はいいました。

「私は、あなたをにぎやかな町へ連れてゆくことができます。そして、安全なところに、あなたを置くこともできます。ただ、

それが、ほんとうにあなたを、幸福にさせるか、不しあわせにさせるか知らないのです。」と、小鳥は答えました。

小鳥は、とこなつの花が無理に頼むのを断りかねて、ついに承知をいたしました。小鳥は鋭いくちばしで土を掘って、花をく

わえて、地から離しますと、そのまま高く空に舞い上がりました。花は、目をまわしていました。小鳥は、長い間飛んで、その日の

晩方ばんがた、にぎやかな町まちに着ついて、公園こうえんに下おりると、花はなを花壇かだんのすみに植うえたのでした。

四

小鳥こどりは、おびえた花はなを公園こうえんの花壇かだんのすみのところに植うえますと、花はなを顧かえりみて、

「さあ、あなたのお望のぞみのところへ連れてまいりました。ここはちようど人間にんげんの歩あるくところも見みえれば、また話はなし声こゑもよく聞きこえます。そして、ここにいれば安心あんしんなのです。あなたは、これからいろいろと世よの中なかの不思議ふしぎなことを知しることができ私わたし

は、ここへ二度とあなたをおたずねするか、どうかはわかりませ
 ん。あなたは幸福にお暮らしなさいまし。」と、うす暗がりの
 中から、やさしい、悲しい声で、小鳥はいいました。
 公園の木立は、青黒い、夜の空に立っていました。細かな
 葉が、かわいらしい、清らかな歯を見せて笑っているように、微
 風に揺らいでいました。花は、あたりのようすがまったく変わっ
 てしまったのを知りました。あのさびしい、うす寒い高原から、
 永久に別れてしまったことが疑われるような、そして、そう
 いうことはあり得ないような、ただなんとなく、おちつきのない
 気持ちでいましたから、小鳥に対して、十分のお礼や、お別れの
 言葉すらいうことを忘れてしまいました。

「さようなら。」と一声いい残して、小鳥の影は、いずこへともなく飛び去ってしまいました。

花は、不安な、悩ましい一夜を送りました。しかし、花は、

「ついに憧れていたところへきた。」と考えると、急に、いきいきとした気持ちになるのです。そのうちに、夜がほのぼのと白んで、太陽が上がった。このとき、花は、どんな光景をながめたでありますよう。

その日から、この花の生活は、一変したのでした。花壇には、赤や、黄や、紫や、白や、さまざま色彩の花が、いっぱい咲いていました。とこなつの花は、それらの花をいままで見たとがありません。みんな自分よりは、脊が高く、いい匂いのす

うつく
る美しい花ばかりでありました。どうして、こんなに、いろいろ
な花がここに植わっているのだらうと怪しみました。あるとき、
みつばちが飛んできて、頭の上をゆき過ぎようとして、また立ち
もどつて、とこなつの花に止まりました。

「なんという、いじけた小さい花だらう。ろくろくこの花には、
みつもありやしまい。いったいおまえさんは、どこからきたので
すか？」と、みつばちはたずねました。

とこなつの花は、みつばちのさげすむようないい方に対して腹
をたてたけれど、忍耐をして、

「わたしは、遠い、高原に生まれて、そこで、雨や、風や、霧
にさらされて咲いていました。」と答えました。

「だれが、おまえさんをここへ連れてきたのですか、私は、毎日、この花壇の上を飛びまわって、ここに咲いているたくさんな花の一つ一つをみまっていますのですが、つい、おまえさんのお姿を見つげなかつた。」と、みつばちはいいました。

「名も知らない旅の鳥が、わたしをここへ連れてきてくれました。」と、花は答えました。

とこなつの花は、このとき、あの霧の深い、うす寒い風の吹いた、さびしい高原を思い出したのです。そして、あの高原にいたころは、どんなに、この小さな赤い、自分の姿が、美しく思われたか？ 高く、青空を飛びゆく小鳥までが、自分を見つけ、わがわが下りてきたのにと考えますと、いま、この花壇にきて、

自分のみすぼらしい、いじけた姿が、ほとんど目に入らないほど、きれいな花の間に混じっているのを悲しく、恥ずかしく感じました。

「ここに咲いている花は、みんなどこからきたのですか。」と、とこなつの花は、みつばちにたずねました。

「西の国からも、南の国からも、また、海のあちらの熱帯の島からもきた。種子や、苗を船に乗せて、人が持ってきたのだ。」と、みつばちは答えました。

とこなつの花は、考えに沈みました。そして、あの高原の自分のそばにあった黙った石や、また自分のいるところから、あちらにあった脊の高い草の姿などを思い浮かべて、いまはそれすら

なつかしく思おもつたのです。

五

もはや、花はなは冷つめたい霧きりにぬれて、しずくの滴したたうつくる美しい、なやま
 しげな姿すがたみずかみを自ら見ることもなく、また、黄たそがれ昏たかがた、高おみい山
 脈くのかなたのうす明あかるい雲くもぎ切れのした空そらあこがを憧かなれる悲おもしい思おもいも
 なくなつて、その高こうげん原うに生はなまれた花は、まへいほんつたく、平はな凡はなな花
 に化かしてしままいました。

ひとり、この花はなばかりでなしに、諸しよこく国こくからここに集あつめられた、
 それらの珍めづらしい花はな々ばなも、みんな特とくしよく色うしなを失うつて、一よう様がいとに街

頭うから風かぜに送おくられてくるほこりを頭あたまから浴あびて、葉はの面おもてが白しろく
なつていました。

むし暑あつい、夏なつの日ひの午ご後ごの公こう園えんは、草くさや、木きさえが疲つかれて物も
憂うれそうに見みられました。そして、赤あかい花はなや、黄きいろ色いろい花はなや、紫むらさきの花はな
が、たがいにからみ合あうようにして、だらけきつて咲さいていたの
であります。

ちようど、このとき、一ひとり人ひとのみすぼらしいようすをした男おとこが、
公こう園えんの中なかへ入はいつてきました。男おとこは、しばらく、ぼんやりとした
顔かおつきで、なにか頭あたまの中なかで考かんえてでもいるように、あたりをぶら
ぶらと散さん歩ぽしていましたが、しばらくすると、花か壇だんの前まえにやつて
きました。

「百合の花の咲いているところは、どこだろうか？」と、あたりに目をくぼつていいました。

花壇には、百合ばかりでも、幾種類となく集められた場所があります。やがて、男は、その前へゆきかかると、

「ああ、ここだ。黒い百合がないだろうか？」と、男はいいながら、百合の花の上に目を向けて探しました。

男は、その中から、つぼみの黒い一本の百合を探し出したのであります。

「これは、黒い百合でないだろうか？」と、彼は、頭をかしげていました。そして、かたわらの木影にあつた、ベンチに腰をかけて空想にふけたのであります。

おとこ
 男には、こんな思い出があつたのでした。——毎年、夏にな
 ると、その小さな町に、お祭りがあつたのでした。その町といふのは、
 この大きな都会にくらべてこそ小さいといわれるけれど、子供の
 時分、その町は、どんなにぎやかなところであつたか。また、
 なんでも欲しいものは、この町に、ないものがなかつた。だから、
 いちばん開けたところであると、ほんとうに、そう思われたので
 ありました。そして、お祭りというのは、この町にある、ある宗
 の本山の報恩講であつて、近在から男や、女が出てくるば
 かりでなく、遠いところからもやってきました。ちようどその人
 たちが、この町に集まることによつて、町じゆうがお祭り気分にな
 かつたのです。

見せ物師は、旅からもやってきました。毎年その日を忘れず
 に、国境を越えてやってくるのでした。彼は、ある日のこと、
 人にもまれながら、寺の境内に入りました。すると、犬芝居
 や、やまがらの芸当や、大蛇の見せものや、河童の見せもの
 や、剣舞や、手品や、娘踊りなどというふうに、いろいろな
 ものが並んでいました。その中に、女の軽業がありました。こ
 の小舎は脊がいちばん高く、看板がすてきにおもしろそうで
 ありましたから、彼はついに木戸銭を払って、奥の方に入ってゆ
 きました。

彼は、そこで、どんなものを見たでしょうか。半裸体の若い
 女が、手にかさを持って縄の上を渡るのや、はしごの頂で逆立ち

をするのや、その他いろいろのものを見ました。しかし、それら
 は、べつに心に深い印象をとどめなかつたけれど、ただひと
 つ、忘れられないものがあつた。それは、やはり若い女が——桃
 の実のように肥つた、顔にはげるほど濃く白粉を塗つて、目ば
 かり大きく黒く、髪はハイカラに結つたのが——堅そうに黒い腹
 帯をしめて、仰向けに一段高い台の上にて、女の腹の上に、
 重い俵を幾つも積み重ねる光景であります。
 彼は、その女のいきいきとした顔と、赤い唇と、黒い腹帯と、
 太い短い足とを、どういふものか忘れることができませんでした。
 小舎の外へ出てからも、町の中を歩いてても、この軽業小舎で
 鳴らしている、ドンチャン、ドンチャンの音が耳についたのでし

た。

六

白いかもめが、晩方になると、北の海の方へ飛んでゆく影が見えて、圃には、切ると内部の真つ赤な、大きなすいかがごろごろところげるころになりますと、町のお祭りは近づいたのです。
 「腹帯が切れて、南の国の町で、軽業の女が死んだ。」といううわさが、だれか、新聞に書いてあるのを見たものか、彼の耳に入ったときに、彼はびっくりしました。

このときまで、まだ目にありありとあの女の姿が残っていたの

で、その女おんなが死しんだのでないかと思おもうと、心しん臓ぞうの鼓こ動どうが高たかくなるのを覚おぼえたのです。南みなの国くにの町まちというのは、どんな町まちであろうか。彼かれは、明あかるい空そらの下したに、赤あかい旗はた影かげや、白しろい旗はた影かげなどがひらひらとひるがえつて、人ひと影かげが、町まちの中なかを往おう来らいする光こう景けいなどを、ぼんやりと目めに描えがいたのであります。

そのうちに、ほんとうにお祭まつりの日ひがきたのでした。そして、去きよ年ねん集あつまつた見みせ物もの師しらは、また方ほう々ぼうから寺てらの境けい内だいに集あつまりました。軽かる業わざの一ざ座ざもやつてきました。彼かれは、どんなに心こころの中なかで樂たのしみにして、その日ひを待まっていたでしょう。

一ねん年は、こうしてめぐつてきた。圃はたけにも、庭にわにも、去きよ年ねんのそこのころに咲さいた花はなが、また黄きに、紫むらさきに咲さいていたのでした。彼かれは、

ドンチャン、ドンチャンとあちらで鳴るにぎやかな音を聞きなが
 ら、町を、その方に向かつて歩いていった。やはり人々にもま
 れながら寺の境内に入ると、片側に高い軽業の小舎があつ
 て、昨年見たときのような絵看板が懸かつていました。彼は、
 木戸銭を払つてのぞきました。そして、幾人もいる肉襦袢一
 枚の若い女らの群れから、目に残っている女を探しました。それ
 らの若い女らは、ほとんど人間とは思われないほど、そして、
 なにかの獣のように、ころころとあたりを転げまわっているの
 す。しかし、いつかの女を探し出すことができなかつた。彼は耳
 にしたうわさを思い出して、ほんとうに、あの女が死んだのでは
 ないかと思つて悲しくなりました。ちようど、そのときであつた。

「昨年、ご当地で、お目どおりいたしました娘は、さる地方に
 おいて、俵を積み重ねまする際に、腹帯が切れて、非業の最期
 を遂げました。それにつきましても、命がけの芸当ゆえ、無事
 になし終わせました際は、どうぞご喝采を願います。」と、出
 方がいった。出方は、いい終わると、拍子木をたたいて小舎の
 奥へ入りました。

あらわれたのは、脊のすらりとした女でした。彼はどういふも
 のか、去年ほどの感興を惹きませんでした。

「やはり、黒い腹帯が切れて、あの女は死んだのだ。」
 彼は、こう思うと、いいしれぬむごたらしさを、かの女たちの
 身の上について感じたのでした。

この日は、町は、いつもと異なつて、いろいろの夜店が、大門の付近から、大通りにかけて、両側にところ狭いまで並んでいました。

彼は、四つ角のところに、さまざまの草花を、路の上にひろげて、商人を見ました。そこから、広い、大通りをまっすぐにゆけば、やはりにぎやかだったが、裏町の方へゆく道は、前後とも、火影が少なくなつて、暗く、溝のくぼみのように、さびしげにさえ見られました。ダリアの花や、カンナの花や、百合の花などが、カンテラの火にゆらゆらと浮き出したように照らされて、いるのが、ちょうど艶麗な女が、幾人も立つている絵姿を見るような気がしました。そして、なかには、朽ちかかつ

た花びらがあつて、だらりと出した舌のように、ながく垂れて
 いるのです。

「この黒い花は、なんだろう？」

一本のひよろひよろとした、茎の頂に、重そうに咲いているの
 を指して、彼はたずねた。

「黒百合です。」と、商人は答えました。

彼は、黒百合の花を見て、魅せられたような気がした。ちよう
 どこのとき、女の黒い腹帯が頭の中に思い出された。しかし、
 気味が悪かったので、買わずに帰りました。その後になつて、黒
 百合は、北海道辺に、まれにあるということを知りました。
 あまり、縁起のよい花でないということも知りました。

七

彼は、その後、いろいろの経験をし、また苦勞をしました。たまたま、この公園にきて百合の花を見て、昔のことを思い出したのです。

とこなつの花は、いつまでも、男が側のベンチから去らずに、それに腰をかけて考え込んでいるのを見ました。花は、小さくびをかして、男が、「黒い百合の花が、咲いてはいはしないか？」といったのを聞いて、高原の景色を思い出しました。とこなつの花は、かつてあの高原にいたけれど、黒い百合の花を見たこ

とがなかったので、脊^{せい}伸び^{のび}をして、その花^{はな}を見^みようとなりました。けれど、地面^{じめん}にはついている真紅^{まっか}の花^{はな}には、あちらの百合^{ゆり}圃^{ぼたけ}に、たった一本^{ほん}まじっている、黒^{くろ}い百合^{ゆり}の花^{はな}が見^みえなかつたのでした。そのうちに、日^ひが暮^くれかかつた。木々^{きぎ}のこずえが、さやさやと鳴^なりはじめて、空^{そら}の色^{いろ}は、青^{あお}黒^{くろ}く見^みえ、燈^{とも}火^{しび}の光^{ひかり}がきらめき、草^{くさ}の葉^はや、木^きのこずえに反^{はん}射^{しゃ}しているのが見^みられたのです。男^{おとこ}は、ベンチから起^たち上^あがりました。

「黒^{くろ}い百合^{ゆり}の花^{はな}が咲^さいた時^じ分に、またやつてこよう。こちら^{そら}の空^{そら}には、どうして、星^{ほし}の光^{ひかり}が、こ^{すく}う少^{すく}ないのか？ 故^こ郷^{きやう}に^いる時^じ分^{ぶん}は、毎^{まい}夜^よ、降^ふるよ^うに、きらきらと輝^{かがや}く星^{ほし}が見^みられたのに……」と、立^たち去^さるときに男^{おとこ}はいいました。

とこなつはなの花は、なるほど、男おとこのいうように、どうしてこつち
 にきてから星ほしの光ひかりが見みえないかと気きがついて、怪あやしみました。あ
 の高こう原げんにいるころ、暁あかつきの風かぜが、頭あたまの上うへの空そらを渡わたり、葉は末すえに露つゆの
 しずくの滴したたるとき、星ほしの光ひかりが、無む数すうにきらめいていた。それが、
 たがいに追おいかけ合あつてもいるように、金きんや、銀ぎんや、青あおや、赤あか
 の星ほしがきらめいていた。そして、いつともなしに時ときがたつと、み
 んな影かげを地ち平へい線せんのかなたに没ぼつしてゆく。
 翌よく日じつは、とこなつはなの花は、朝あさのうちから、空そら模も様ようがおかし
 く、暴ぼう風ふうのけはいがするのを身みに感かんじました。
 昼ひるごろ、せんだつてのみつばちが、どこからともなくやってき
 て、花はなの上うへに止とまりました。

「どうなさいましたか？」と、とこなつの花は、みつばちに声をかけました。すると、みつばちは、

「今日は風ですよ、なんだか天気がおかしくなりました。こういう日は、高い脊の花に止まっているのは危険です。いくら香があつても、またきれいに咲いていても、風といっしょに吹き飛ばされたり、折れた下になつたりしては、たまりませんからね。今日は、あなたのところに置いてくださいまし。あなたは、脊が低く、地面についていますから、ここなら危ないことはありません。あの雲ゆきの早いのをごらん下さい。」と、花に向かつていいました。

花は、頭を上げて空を見ました。

「ほんとうに、そうですね。」

「あなたは、黒い百合の花をごろんになりましたか？」と、とこなつのは、みつばちにたずねました。

みつばちは、小さな、すきとおるような、美しい羽をふるわして、

「黒い花ですって？ 私どもは、黒い花は、人間の死骸から、生えたのだといっています。そして、毒があるといつて、けつして止まりはいたしません。めったに、黒い花はないものです。なんでも黒い花を、ただ見ただけでも悪いといっていますよ。」と答えました。

とこなつのは、これを聞くと、くびをすくめました。そして、

男おとこのいったことから、脊せいの伸びをして、この近ちかくに咲さいているのを見みようとしたことを思い出だして、思おもわずぞつとしました。

「なんで、そんなことをお聞ききなさるのですか？」と、みつばちはたずねました。

「いいえ……。」と、とこなつの花はなはいつて、黙だまってしまいました。

ますます風かぜの吹ふくのが、強つよくなりました。

八

「今日きょうは、公こうえん園えんに、なにかあるのでしようか。」と、花はなは、先さ

つぎ刻から風の中を人々が、そろそろと花壇のまわりを歩いているので、なんでもこの付近のできごとなら、知らないものがないほどくわしいみつばちに向かつて、たずねました。

すると、みつばちは手足をたがいにこすりあいながら、
「農産物の展覧会があるのですよ。花の咲いている時分は、わたしひろはたけ、圃を渡つて飛び歩いたものです。なにしろ、二里も先まで、いったのですからね。それが、日数がたつにつれて、それらの野菜は、太い根を持つたり、また、まるまると肥えたり、おおつぶ大粒に実つたりしましたからね。大根や、ねぎや、豆や、芋などを昨日から、近在の百姓だちが会場に持ち込んでいますよ。そして、一等と二等とは、たいした賞品がもらえると

いうことです。「と、みつばちは答えました。

ほんとうに、公園はいろいろの人たちでにぎわっていました。あちらから楽隊の鳴らしている楽器の音が、風に送られて聞こえてきたり、また、歌をうたっている声が聞こえてきたりしました。

この日、白髪のおばあさんが、農産物展覧会場へあらわれしました。

おばあさんは、なにも農産物に興味をもったわけではありません。場末の町に住んでいるのだけれど、用事があった、こちらの知った人のところへやってきますと、その人の家で、展覧会のある話を聞きました。

「大根でも、なすでも、芋でも、なんでもよくできたものには、
一等、二等と礼がついて賞が出る。」ということを知ると、ふと、
おばあさんは、胸に思い出したことがあります。

「その展覧会は、どこにあるのですか？」と、おばあさんはた
ずねました。

「じき、近くの公園ですよ。まあ、いつてごらんなさい。それ
は、大きななすや、みごとなきゆうりや、野菜物はなんでもあ
りますから。大根なんか、どうしてあんな太いのがあるかと思
われるほどですよ。」と、知った家の人はいいました。

おばあさんは、その話を聞くと、いそいそとして、その家から
出て、公園へやってきました。公園のこの展覧会場は、

楽隊で、人を呼び寄せていました。そして、そこでは、わずかな日数を限つて、その間は、野菜物を安く売るのであります。おばあさんは、内へ入ると、どの出品物にも目をくれずに、すぐに大根の並べてあるところへいつてみました。するとそこには、白い、太い、大根がいろいろと並べてあつて、その中のいちばん太いのに、赤い紙札がついて、「一等賞」と書いてありました。

なんでも、一等賞は、たいしたほうびがもらえるらしいのであります。それを見ると、おばあさんは目をまるくしました。

「おや、これが一等賞かい？」
と、独り言をいいました。

じつは、おばあさんは、今朝、すぐ自分の家の近くの八百屋で、
 おお大きな大根を見てびっくりしたのです。いままでの、長い年
 きに、おばあさんは、たくさんの大根を見たけれど、いまだ
 にこんな大きなのを見たことがなかったのです。

「まあ、大きな大根だこと。」と、そのとき、おばあさんはい
 いました。

「私も長い間八百屋をしていますが、こんなのを見たのは、はじ
 めてです。」と、八百屋の主人もいいました。

おばあさんは、展覧会にきて、一等賞をとった大根を
 見つめて、これよりは八百屋の店頭にあつたのが大きいと思
 いました。

「まだ、あの大根だいこんは売れずにあるだろうか。あれを持ってきてここへ出せばだ、あのほうが一等とうしやう賞だ。」と、おばあさんは思おもいました。そして、いそいで、外そとへ出ると、電車でんしゃに乗のってゆきました。

三、四時間じかんの後のち、おばあさんは、大きな二本ほんの大根だいこんを持って、展覧会てんらんかい場じやうに現あらわれました。

係かかりのものは、驚おどろきました。それは、一等とうの出品物しゅつぴんぶつよりたしかに大きく太ふとかったからであります。

「おばあさん。ほんとうにみごとな大根だいこんですね。」と、係かかりのものはいいました。

九

「おばあさん、圃はたけの土は、赤土あかつちですか、黒土くろつちですか。」と、係かかりのものは問といました。

「黒土くろつちでございます。」と、おばあさんは答こたえました。

「種子たねはどこから取とり寄よせて、何なん月の何なん日に圃はたけにまいて、いひりつ肥料ひりようを何なん回かいぐらいやつたのですか、どうか話はなしてください。」と、係かかりのものはいいました。

そんなことを問とわれると、おばあさんは、自分じぶんが圃はたけに作つくつた大だ根いこんでないから、ちつともわかりませんでした。ただ、もじもじとしていて、答こたえることができなかつたのであります。

「おばあさん、あなたがお作りになつたのではないでしょう。」
と、^{かかり}係のものはいいました。

「^{わたし}私は、八百屋にあるのを^か買ってきました。しかし、これは^{わたし}私のものです。」と、おばあさんはいいました。

「それでは、いけません。買^かつてきたものは、いけません。」と、^{かかり}係のものは、^{あたま}頭を^ふ振りながら^{こた}答えました。

「なぜですか。こんなに^{おお}大きいのが、なぜいけません。私の持^もつてきた^{だいこん}大根が一等^{とうしょう}賞でございます。」と、おばあさんは、^{しら}らが^{あたま}あたま^まま白髪頭をふりたてて^{いか}怒り^{こえ}声でいいました。

^{かかり}係のものは、これを^き聞くと^{わら}笑いながら、

「たしかに、この^{だいこん}大根は、一等^{とうしょう}賞の^{しかく}資格があります。けれ

ど、作り手がわからないから、賞品を渡すわけにはいきませ
 ん。」といいました。

「作り人は、だれでも、私を買ったのだから、この大根は、私
 のものでございます。賞は、私がもらいます。」と、おばあさん
 は、それになんの不思議があらうかといわぬばかりにがんばりま
 した。

しかし、係のものは、頭を振りました。

「いいえ、賞品は、野菜を作った人の手柄をほめてあげるの
 で、その他の人には、だれにも渡さないのです。この大根を作
 った百姓は、どこのだれという人だか、おばあさんにはわかりま
 すまい。みごとな大根ですから、ここに並べておいて、みんな

に見せるのはさしつかえないから、二、三日貸しておいてください。いと、係のものはいいました。

おばあさんは白目を向けて、係のものをしながら、

「よく、そんなことがいわれたものだ。これは私のものだから、ほうびをくれないなら、さつさと持つて帰りますよ。較べて見れば分かるものを、賞をくれるのを惜しんで、ただ貸してくれないものだ。」と、欲張りのおばあさんは、ぶんぷんと怒つて、大きな二本の大根を抱えて、会場かいじょうの入り口ぐちから出ました。黄昏方たそがれがたの空は、水あめのような色いろをしていて、ひどい風が、ヒューヒューと音をたてて吹いていました。電線でんせんはうなつて、公園こうえんの常磐木ときわぎや、落葉樹らくようじゆは、風かぜにたわんで、黒い頭くろあたまが、空そらに

波なみのごとく、起伏きこくしていました。

おばあさんは、二本ほんの葉はのついてある大きな大根だいこんを抱かかえて、ちようど、赤あかい旗はたを、監督かんとくが振ふっている電車でんしゃの交叉点こうさてんの方ほうへと歩あるいていきました。

風かぜは、いくたびもおばあさんを吹ふき倒たおそうとしました。おばあさんは、二本ほんの大根だいこんをしつかりと抱だいて、風かぜに吹ふき倒たおされまいと歩あるきました。風かぜは、おばあさんの白髪しらかみを波立なみだたせ、大根だいこんの葉はを吹ふきちぎりそうに、もみにもんだのであります。

そのうちに、ピューツときた風かぜは、とうとうおばあさんを倒たおしてしまいました。おばあさんは、大根だいこんを抱かかえたまま、起おき上あがろうとしましたが、風かぜが強つよくて起おき上あがることができませんでし

た。そのうちに、通^{とお}る人々^{ひとびと}が、黒^{くろ}くなつて、そのまわりに集^{あつ}ま
つてきました。

「みつばちさん、あちらが、たいそう騒^{そうぞう}々しいですね。」
と、とこなつ^{はな}の花は、みつばちにいいました。

「じき、この鉄^{てつ}さく^{こた}のあちらは往^{おう}来^{らい}です。いつてみてきましよ
う。」と、みつばちは答^{こた}えて飛^とびゆきました。

やがて、みつばちはかえつてきて、花^{はな}の上^{うへ}に止^とまると、
「どこかのおばあさんが転^{ころ}んだのを、しんせつに人^{ひと}が起^おこしてや
ると、おばあさんの抱^{かか}えていた一本^{ほん}の太^{ふと}い大^{だい}根^{こん}が、二つに折^おれ
たといつて、おばあさんが怒^{おこ}つているのですよ。」といいました。

十

翌よくじつ日ひになると風かぜは静しずまりました。朝あさ早くから、まだ太陽たいようの

上あがらないうちに、みつばちは起おきて飛とぶ用意よういをしました。

「わたしわたしは、昨日きのうは一日いちにちなにも食たべなかつた。今日きょうは腹はらがすいてたま

らないから、大おおきな花はなを尋たずねまわつて、うんとみつを吸すつてこな

ければなりません。じゃ、さようなら。また、お目めにかかります

。」といつて、とこなつはなの花はなに別わかれを告つげていこうとしました。

とこなつはなの花はなは、黙だまっていました。いざみつばちが飛とび去さる

うとするときに、それを呼よび止とめて、

「みつばちさん、いくら腹はらがすいていても、けつして、黒くろい百ひゃく合ごう

の花^{はな}などに忘れ^{わす}ても止^とまってもはいけません。お気^きをつけなさいまし。「といいました。

「ごしんせつに、ありがとうございます。気^きをつけます。」といつて、みつばちは、元^{げん}気よく、朝^{あさ}の空^{くう}気^きの中^{なか}を、羽^{はね}を鳴^ならして飛^とんでゆきました。

その日^ひは、昼^{ひる}過^すぎから、夜^{よる}にかけて、雨^{あめ}が降^ふりました。そして、雨^{あめ}は、じきにやみました。すると、すがすがしい気^き分^{ぶん}が、あたり^{ただよ}に漂^よって、ぬれた木^きの葉^はや、草^{くさ}の葉^はが、そこここに立^たっている電^で燈^{とう}の光^{ひかり}に照^てらされて、きらきらと輝^{かがや}いています。

とこなつの花^{はな}は、みつばちが、夜^{よる}になっても、帰^{かえ}ってこないの^で、どこで眠^{ねむ}ったろうと考^{かん}えていました。風^{かぜ}が、さやかに吹^ふきわ

たると、木々の露がぽたぽたと地上に落ちました。いつしか快
 い気持ちになつて、花は眠りますと、ふいに、夜中に、ひやりと
 なにか身に感じたので、驚いて目をさましたのであります。

花は、おそくなつて、みつばちが帰つてきて、ぬれた体を触れ
 たのだと思いましたが、さしてくる電燈の光で見ると、それは、
 みつばちでなくて、羽の黄色な、小さいとがった形をした蛾であ
 りました。蛾の黄色なすきとおるような羽は、気味の悪いほど、
 冷たく、硫黄の色のように見えたのです。花は、高原にいる時
 分に、たくさんの蛾をば見ました。しかし、この蛾と同じ感じの
 するような蛾をば見なかつた。この蛾は、人間の目を見るよう
 に、くるくるとした二つの目を持っていました。

花は、蛾に対して、なにもいう気にはなれなかったが、しかし、知らぬ顔をしていることもできなくて、

「黄色な蛾さん、いまごろ、あなたは、どこから飛んできたのですか。私は、まだあなたのような姿の蛾を見たことはありません。山からですか？ 野原からですか？ どこから、あなたは飛んできたのですか。」と、たずねました。

蛾は、ちょうど体の色にふさわしい、冷たい、すきとおる声で答えました。

「私たちは、戦場で産まれました。たくさん人間が死んだ、その死骸が腐っている広い野原の中で産まれました。私たちは、明るい日の光や、火や、炎を見ることがは大きいです。真つ

くらやみやみだいす
 暗な闇が大好きなのです。わたしは風の吹く日に、暗い野原から
 のはら
 野原へ、町から町へ飛んでゆきます。そして、みんな火という火
 を消してしまいます。明るい街を、真っ暗にしてしまうのです。
 それがために、私たちは、自身の体が火に焦けても、また死んで
 もいといはいたしません。明るいということ、死よりも恐ろし
 いのです。」と、蛾は、くるくるとした二つの目で花を見守りま
 した。

「そんなに、あなたがたは、たくさんいっしょになって、旅をな
 さるのですか。」と、花は問いました。

「幾十万、幾百万、その数はわかりません。私たちは、太陽の
 輝いでいる空も暗くすることができません。また、どんなにぎや

かな明^{あか}るい街^{まち}の火^ひでも暗^{くら}くすることができません。私^{わたし}たちは、昨夜^{ゆうべ}、海^{うみ}の上^{うえ}を渡^{わた}つて、南^{みな}の国^{くに}へゆこうとして、風^{かぜ}のため^ににわ^ずかばかりが迷^{まよ}つて、この方^{ほう}向^{こう}に飛^とんできました。いまに、その私^{わたし}たちの仲^{なか}間^まが、ここ^この空^{そら}を過^すぎるで^ありま^しよう。」と、蛾^がはいいました。

花^{はな}は、頭^{あたま}をあ^あげ^げて、そばに立^たつてい^いる、電^{でん}燈^{とう}の光^{ひかり}を見^みますと、蛾^がが幾^{いく}つも止^とま^まつてい^いるのでした。

十一

花^{はな}は、たちまちのうちに、無^む数^{すう}の黄^き色^{いろ}な蛾^がが飛^とんできたのを見^み

ました。どの木の葉にも、またどの草の葉にも、蛾が止まっていた。ちょうど花びらの降りかかったように見えたのです。

急に、さわさわという音がして、燈火の光がうす暗くなった

と思つて、立つている電燈の方を見ると、幾百、幾千となく蛾

が火を目がけて襲つたのです。そのために、光をさえぎつたので、

中には、ガラスに頭を打ちつけて、下に落ちる蛾や、火のまわり

を、すきもあろうかと、羽ばたきをしながらまわるのや、いろいろ

ありました。このとき、あちらに立つている電燈を見ても、

同じような光景でありました。そして、羽の白い粉が、火の周

囲の空間を、光つたちりのまかれたように散っているのです

た。花は、いま蛾のいったことを思い出して、蛾の仲間が、よう

やくここへやってきたのだと知りました。

この都会とかいの火ひを消けすために、蛾がが襲おそつてきたのです。とこなつ
 の花はなは、このたくさんな数かずえきれないほどの黄色きいろの蛾がが、いずれ
 も二つのくるくるとした、円まるい人にんげん間の目めのような目めを持ち、長なが
 いひげと大きな口くちを持つているかと思うと、ぞつとするほど、恐き
 怖ようふを覚おぼえたのです。で、目めを閉とじて、見みまいとしていました。

そのうちに、待まち通とおしかった夜よが明あけかかった。花はなは、うなさ
 れながらも、いくらかは眠ねむつたような気き持ちもしました。しかし
 頭あたまは重おもかったのであります。

花はなは、あたりが明あかるくなると、自じぶん分の体からだの上うえに止とまっていた、
 黄色きいろな蛾がが、いないのに気きづきました。そればかりでなく、頭あたまを

上げて、あたりを見まわしますと、あれほどたくさんに飛んでき
た蛾が、影も形もないのに驚いたのであります。

「昨夜のは、みんな夢だったろうか？」と、花は、怪しまざるを
得なかつたのでした。

敏捷で、自由で、伶俐で、なんでもよく知っているみつば

ちは、きつと昨夜のできごとも知っているであろう。はやく、み
つばちが、やってきてくれないものかと、花は、待っていました
が、その日は、みつばちはついにきませんでした。

高原に生まれた花は、この街の中まちなかにきてから体からだがたいそう弱
りました。朝晩、冷やかな露つゆを吸すわないだけでも、元氣げんきをな
くした原因げんいんだったのです。それに、むし暑い日あつひがつづいたの

で、頭までがいきいきとせずに重くあつたのです。

とこなつの花は、高原にいて、あの寒い、雪の積もる冬に
あうことをおそれましたが、ここにきてから、こんなに早く体が弱
つてしまつては、秋を待たずに枯れてしまうようにさえ思われま
した。

「ああ、わたしも、もう先が長くあるまい。」と、花は、自らも
考えました。そして、昼間も、うつらうつらとした気持ちで、居
眠りをつづけているようになりました。

周囲の常磐木の葉に、強く照りつけた太陽の光も、このし
ぼみかかった、哀れな花の上には頼りなげに照らしたのです。ち
ようど、この花に映つた太陽の光は、燐の炎のように青白く

さえ見みられました。

だれかつぶやいている声こえがしたので、ふと花はなは、目めをさましますと、もう日は暮くれていました。そばにあつたベンチに腰こしをかけたいる人にんげん間は、たしかに、せんだつて、黒くろい百ゆり合りの花はなを探さがしていた男おとこであります。

「なぜだか、あの笛ふえの音ねを聞きくと、私わたしは、お母かあさんと、あの山やま奥くの温おん泉せん場ばへいつたときのことことが目めにうかんでくる。あの時じ分ぶんは、お母かあさんは達たつ者しゃで、自分じぶんは、まだ子こ供どもだつた。未み開かいな温おん泉せん宿やどでは、夜よるは谷たに川がわの音おとが聞きこえて静しずかだつた。行あん燈どんの下したで、毛けずねを出だして、男おとこどもが、あぐらを組くんで、下したを向むいて将しょう棋ぎをさしていた。」

男は、こうひとり言ひとごとをしていました。

もう、空そらは暗くらかったので、花はなには、男おとこの顔かおがわからなかつた。

ただその声こえに聞き覚えおぼがあつただけです。公園こうえんの鉄てつさくの外そとを

按摩あんまの吹ふいて通とおる笛ふえの音ねが、細ほそく、きれぎれに聞きこえてきました。

その後のちは、ベンチによりかかつた男おとこのため息いきばかりが、闇やみの中なか

でしたのであります。

十二

翌よく日じつの朝あさは、いい天気てんきでした。白しろい雲くもが、静しずかにこずえの頂いただきを離はなれて、空そらに流ながれていました。とこなつの花はなは、ぐったりとし

ていました。そして、いつになく元気がなかつたのです。どこからかみつばちが飛んできました。

「いい天気じゃありませんか。」といつて、花に声をかけました。
「昨夜は、恐ろしい夢を見て、今日は、頭が重くてしかたがありません。」と、花は答えました。

「どんな夢をぐらんにになりましたか？ ほんとうに顔の色がよくありませんね。あなたは、だいぶん疲れておいでのようですから、お大事になさいまし。」と、みつばちがいました。

とこなつのは花は、一昨夜、黄色な蛾がきたことを語りました。すると、みつばちは、花のいうことを半分も聞かずに、「なんで夢のもんですか。みんな事実ですよ。この公園には、

くろ^{くろ}ゆり^{ゆり}はな^{はな}が咲^さいたり、不思議^{ふしぎ}な毒蛾^{どくが}がきたりしたために、人^に間^{かん}が大騒^{おおさわ}ぎをしていますよ。あなたは、まだなんにもお知^しりになりませんか。」と、みつばちはいいました。

とこなつの花^{はな}は、これを聞^きくと、

「黒^{くろ}い百^{ゆり}合^{はな}の花^{はな}が咲^さいたのですか？」とたずねました。

「百^{ゆり}合^{ばたけ}圃^{ほんさ}に、一本^{ほん}咲^さいています。それで、今日^{きょう}あそこへ植^{しよくぶ}物^{ぶつ}学^{がく}者^{しや}がきて検^{しら}べています。後^{のち}ほどここへもあの人^{ひと}たちは、やっ
てくるでしょう。」と、みつばちはいいました。

とこなつの花^{はな}は、なんとなく胸^{むな}騒^{さわ}ぎを感じ^{かん}じた。

「みつばちさん、そんなら、一昨^{さくや}夜^や、たくさんきた蛾^がは、毒蛾^{どくが}な
んでしょうか。」と問^といました。

「毒蛾どくがですとも、昨夜さくや、ついこのベンチこしに腰こしをかけていた男おとこが、あの蛾がに刺さされたのです。そして、病気びょうきになつたというので、やはり学者がくしゃが、今日きょうこの公園こうえんにきて、蛾がを探さがしています。しかし、あれほどいた蛾がが、不思議ふしぎなことに、一匹ひきも見みつからないですよ。」と、みつばちはいいました。

とこなつの花はなは、このそばのベンチこしに腰こしをかけていた男おとこが、蛾がに刺さされて病気びょうきになつたということきを聞いて、びつくりしました。

「なんという、あの人ひとは、不ふしあわせの人ひとなんでしょうね。」と、花はなは、あの男おとこが独ひとり言ごとしていたことごとなどを思おもい出だしながらいきました。

「その男は、なんでも昼間黒い百合の花を折ろうとしたのです。それを番人に見つかつて、しかられたのです。男は、夜、ここへやつてきました。すると、一昨夜、この都を襲つた毒蛾が、どこかに残つていたとみえて、その男を刺したのです。それで男は、毒が身体にまわつて、なんでも死にそうだといいますが、私は、黒い百合の花に触れたのではないかと思ひます。」と、みつばちは答えた。

このとき、あちらでは、にぎやかな音楽の響きが起こつていました。なにかの催し事があるとみえるのです。

一方に悲しむものがあれば、また、一方に楽しむものがある。それが、この世の中の有り様でした。このとき、こちらに、ぞろ

ぞろと歩いてくる人たちがありました。それは、みつばちが、先せ刻んこくいたた学者がくしゃたちの一行こうであります。その中の白い洋服しょうふくを着きて、眼鏡めがねをかけた一人ひとりは、とこなつはなの花の咲さいている前まえに歩あゆみ寄よりました。

「やあ、こんな花はながここに咲さいているのは珍めづらしい。このとこなつは、高たかい山やまにあるとこなつです。」と、ほかの人々ひとびとを顧かえりみていつた。

「どうして、こんなところに咲さいているのでしよう。」と、その一人ひとりがたずねました。

「まれにあることです。風かぜか、なにかで、種たね子が飛とんできたのですね。」と、白しろい洋服ようふくの男おとこは答こたえました。そして、手てをさし伸の

べて、とこなつはなの花を根ねもとから引ひき抜ぬきました。

鳥とりが、くわえてきて、ここに植うえた、花はなの運うん命めいも、ついに終おわりがきたのであります。みつばちは、それを見みると、いずこへともなく飛とびゆきました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「朝日新聞」

1922（大正11）年6月26日～7月10日

※表題は底本では、「公園《こうえん》の花《はな》と毒蛾《どくが》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

公園の花と毒蛾

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>